

# 八十八夜望郷の念

## 一字一筆

静岡の今

今年のGW(ゴールデンウィーク)も終わったが、大型連休期間のカレンダーで気になる日があった。「八十八夜」(5月2日)である。昭和の日、憲法記念日、みどりの日、こどもの日と国民の祝日が集中す

る中で、どこか肩身が狭そうに見えた。立春から数えて88日目、農家に種まきの適期を知らせる大切な日。特に茶産地・静岡にとって「夏も近づくと八十八夜...」の文部省唱歌を口ずさんだ世代も多かるうが、私には八十八夜を詠んだ気になる一句がある。

望郷の目覚む八十八夜かな  
藤枝市岡部町出身の俳人・村越化石(本名・英彦)さんの一句である。村越さんは1938(昭和13)年、16歳の時にハンセン病と診断され群馬県草津町の国立ハンセン病療養所に入所。闘病中に失明したが70年以上句作を続け、「魂の俳人」と言われた。この一句は、毎年八十八夜のころになると生まれ故郷が思い起こされるとつたっている。

望郷の念は誰にもあるが、村越さんはなぜ「八十八夜」にその思いに駆られたのか。藤枝市岡部町の生家を、GW中に訪ねた。

生家は、良質な茶産地として知られる「玉露の里」近くにあった。茶畑に包まれた集落は、ちょうど茶摘みと新茶生産の最中だった。村越さんがこのころ望郷の念に駆られるのは、きつとこの茶畑の光景が脳裏に浮かんだからだろう。

2014年、91歳で入所先で亡くなった村越さんは、生家の菩提寺で眠っている。75年ぶりの「里帰り」をふるさとの茶畑と八十八夜の句碑が迎えた。

隣接した茶どころ・島田市金谷では、紺がすりに前掛け姿の女性約千人が「ちやつきり節」などの踊りを披露、新茶シーズンの到来を祝った。踊り疲れて家路につく子供茶娘には学校と勉強が待っている。

前静岡県監査委員・

宣永久雄

「茶娘道中」の踊りから帰る子供茶娘 島田市金谷、全日写真・玉舟祥子さん撮影

